

ARIAKE KOSEN

# 図書館報

Vol. 6  
2000. Dec.

特集

21世紀を前に本校図書館を顧み  
これからの図書館を展望する



## CONTENTS

特集／21世紀を前に本校図書館を顧み これからの図書館を展望する	2~5
本校図書館の歩み	2~3
図書館の近未来	4
他高専図書館レポート	5
購入図書紹介	6~7
読書感想文コンクール	8~13
入賞者	8
入賞作品紹介	9~13
審査を終えて	14
スタッフ紹介	14
図書館統計	15
郷土の文化財・編集後記	16



## 特集

# 21世紀を前に本校図書館を顧み これからの図書館を展望する

本校ができたのは昭和38年、今から37年前のことです。最初の年は自前の教室ではなく、荒尾第一中学の分校跡を仮校舎として使いました。もちろん図書館などあろうはずがありません。翌昭和39年、学校の校舎ができて、現在のＬＬ教室が図書室になりました。

図書館活動の開始です。それから7年後の昭和47年に現在の図書館が完成し、現在に至っています。

図書館のありようもこの10年くらいの間にずいぶん様変わりしてきました。端的に言えば、図書館にもＩＴ革命が起きているということです。以前は蔵書を検索するためにカード目録を使っていました。新しく図書を購入するとカードに記入して目録としていたのです。現在は、新しく購入した図書の情報はデータベースに登録され、コンピュータを使って検索することが普通になっています。また、図書館同士のネットワーク化が進み、本校にない図書や文献でも、瞬時に検索して、お目当ての資料を所蔵している図書館から送ってもらうことができます。そして、辞書や事典などはCD-ROM化され、学術雑誌は電子ジャーナルとしてインターネット上で提供されるなど、書籍そのものの電子化が急速に進みつつあります。

これから本校図書館が歩んできた道のりを振りかえり、21世紀の図書館はどのような姿になっているかを展望してみましょう。

## 本校図書館の歩み

年 月	出 来 事	館 長	職 員
昭和 38年4月	荒尾市増永の仮校舎（現荒尾市図書館）において第1回入学式	棚町 知弥 (S38~46)	川崎 征子 (S38~41) 黒田 芳則 (S40~42)
6月	大牟田市図書館の巡回文庫（ひまわり文庫）より集団貸し出しを受ける		倉本 国弘 (S40)
4月	図書室報第1号発行		金子 馨 (S41)
11月	図書室報第3号発行 (この号より「蹊（こみち）」と命名)		米田美沙子 (S42~51)
39年3月	現在地に新校舎竣工		富安 計太 (S43)
4月	図書室開設（現LL教室）		戸上 清子 (S43~) 中島 冠守 (S46~49)
47年2月	現図書館竣工	清水 正夫 (S47~50)	金子美千代 (S46) 永野 博子 (S47)
3月	ラグビー部員の奉仕活動により図書室 より図書館への移転作業		
4月	図書館開館 (分類については主としてNDC（日本十進分類法）を用いたが、 理工学系図書に関してはUDC（国際十進分類法）を用いた。 しかし、47年度より全ての図書にNDSを採用)		
4月	図書館運営委員会発足		
52年4月	機械処理による図書館利用統計の開始	池本 憲義 (S51~54)	宮川 喜己 (S51)
5月	学生の希望図書の購入を決定		古賀 竹弘 (S52)
53年8月	レファレンス・コーナーの設置		山本 久 (S52~53)
54年4月	目録カード複製のための高速度プリン ターの導入		安永振一郎 (S53~56)
3月	学生図書委員会の発足		宮川 喜己 (S56~H2)
55年6月	J O I S 情報検索サービスの開始		足達 雅代 (S57)
56年3月	図書の貸し出し方式の変更	下村龍太郎 (S55~56)	
12月	読書三訓を制定し、掲額		
57年7月	第1回校内読書感想文コンクール開催 (昭和62年度まで実施)	丹後 杏一 (S57~62)	

年 月	出 来 事	館 長	職 員
58年2月 2月 8月 63年3月 平成 1年8月 3年7月 8月 9月 4年2月 4月 5月 7月 10月 5年1月 4月 9月 6年4月 7年8月 3月 4月 12月 8年2月 3月 7月 9年2月 4月 9月 10月 10年4月 9月 11年4月 12年3月 8月 9月	<p>「読書感想文集」を発行</p> <p>「参考図書目録」(第1集)を発行</p> <p>図書館閲覧室冷房工事完了</p> <p>文書作成用パソコンNECモデル07導入</p> <p>蔵書点検</p> <p>図書館だより「としょくら」第1号発行</p> <p>電算機書誌事項入力開始</p> <p>図書システム(本体)導入に伴いワークステーション(2台目)接続</p> <p>図書の貸し出し・返却業務開始に備え利用者マスター入力完了</p> <p>閲覧業務(貸出・返却業務)本格始動</p> <p>週5日制実施に関連して土曜開館(試行)開始</p> <p>「としょくら」を「図書館俱楽部」と改称</p> <p>国立国会図書館との相互貸借「図書館貸出」が認可</p> <p>図書貸出券を全学生に配布 (図書貸出の電算機処理開始)</p> <p>夜間開館開始(19時まで)</p> <p>1階ロビーに本校の歴史関連資料を展示</p> <p>夜間開館時間の延長(20時まで)</p> <p>校内読書感想文コンクール再開</p> <p>検索用パソコン2台設置</p> <p>研究閲覧室のカーペット張り替え</p> <p>「図書館報」創刊</p> <p>2階セミナー室の改修</p> <p>ブック・ディテクション・システム設置</p> <p>2階閲覧室入り口の改修</p> <p>2階セミナー室にテレビ・ビデオ等を設置</p> <p>コインコピー機設置</p> <p>図書館を一般市民に開放(現在の登録者数89名)</p> <p>他大学等への文献複写依頼を、学術情報センター(現在の国立情報研究所)のNACSIS-ILLシステムを利用して行うようとする</p> <p>図書館美術ギャラリー誕生 (大牟田美術協会からの絵画の寄贈を受けて)</p> <p>長岡技術科学大学と全国の国立高専が共同利用する外国雑誌 目次データベースの導入</p> <p>図書館のホームページを開設</p> <p>新しい電算機システムの導入 (図書館の蔵書検索(O P A C)がインターネット上から検索可能になる)</p> <p>学習閲覧室および1階美術ギャラリーのカーペットを張り替え、これを機に学習閲覧室の書架の配置替えを行う</p> <p>事務室から閲覧室が見通せるように、カウンターと事務室の仕切り壁を撤去</p> <p>ホームページ上から図書購入申し込み、文献複写申し込み、図書購入予算等の確認ができるWeb Serviceの開始</p>	<p>宮本美沙子(S60~)</p> <p>向井 昭三 (S63~H1)</p> <p>木佐木 尚 (H2~3)</p> <p>原田 克身 (H4~5)</p> <p>中村 雄一(H1)</p> <p>宮川 英明 (H6~7)</p> <p>新谷 筆一 (H8~9)</p> <p>昌子 喜信(H9~)</p>	 
10年9月 11年4月 12年3月 8月 9月	<p>学習閲覧室および1階美術ギャラリーのカーペットを張り替え、これを機に学習閲覧室の書架の配置替えを行う</p> <p>事務室から閲覧室が見通せるように、カウンターと事務室の仕切り壁を撤去</p> <p>ホームページ上から図書購入申し込み、文献複写申し込み、図書購入予算等の確認ができるWeb Serviceの開始</p>	<p>中本 潔 (H10~11)</p> <p>村岡 良紀 (図書館主任) (H10~)</p> <p>瀬戸 洋 (H12~)</p>	

## 図書館の近未来

まもなく21世紀。図書館の近未来はどのようなものでしょうか。ここでは、出版や図書館の最先端を覗いてみることにしましょう。ここに紹介されている事例をパソコンの画面上に実際に呼び出してみてください。これから図書館の近未来が見えてくるはずです。

### ネットワーク社会の広がり

#### ◆電子出版

出版の世界では今、グーテンベルクが活版印刷術を発明して以来の大きな変革が起こっています。紙に代わる媒体として電子的な媒体で出版が行われはじめました。いわゆる電子出版です。いろいろな試みがなされている中で、図書館と関連が深い百科事典をとりあげてみましょう。平凡社の『世界大百科事典』と同じ内容が電子化されてインターネット上で利用できるようになっています（「ネットで百科@HOME」(<http://ds.hbi.ne.jp/netencyhome/>)）。有料サービスですが、何十巻にもなる印刷体の百科事典と比べると破格の料金です。何より場所をとらず、CD-ROM版のように媒体の管理も必要ないことから、これからの百科事典の在り方を示唆するものと言えます。『ブリタニカ百科事典』もオンライン版が提供されており（「ブリタニカ・コム」(<http://www.britannica.com/>)）、こちらは無料でサービスされています。

#### ◆電子ジャーナル

学術雑誌の世界では、従来印刷体で発行されていたものが電子化されてWeb上で流通するようになってきました。大手の学術出版社は言うに及ばず、学会・協会や大学が発行する学術雑誌の電子化が進んできています。

学術雑誌の購入数が多い大学では、商業出版社が提供する電子ジャーナルがよく利用されています。また、一部の高専においても長岡技術科学大学との共同利用の形で、電子ジャーナルが平成11年度から利用されるようになりました。（IDEAL, Pro Quest）。

大学で利用されている電子ジャーナルの一例として、東京工業大学（<http://www.libra.titech.ac.jp/online.html>）の電子ジャーナルのタイトルリストを見てみましょう。ライセンスの関係から本文を表示して見ることはできませんが、どのような電子ジャーナルが提供されているのかを知ることができます。

日本国内の学会・協会が発行する学術雑誌の電子ジャーナル化を、編集からインターネット上の提供にわたるまで総合的に支援するJ-STAGE（<http://www.jstage.jst.go.jp/ja/>）というシステムを科学技術振興事業団が開発し、平成11年度から運用を開始しています。平成12年11月現在、国内の学協会発行の28誌の学術論文誌の全文情報が無料で提供されています。

大学が発行する研究紀要などの学術雑誌の電子化も進んできました。名古屋大学図書館のホームページ上に、全文を閲覧できる全国の大学等の研究紀要のリストが掲載されています（<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/kiyou/kiyou.html>）。

### ネットワーク上の図書館資料

インターネットの急成長により、インターネット上には膨大な情報が蓄積され、印刷された資料やCD-ROMのようなパッケージ型の電子資料を扱ってきた図書館としても、このインターネット上の情報源を無視できなくなりました。インターネット上の有益な情報源を、従来の図書館資料と同様に

### 図書館 昌子 喜信

提供していくことが必要となってきたのです。

しかしながら、インターネット上の情報は、情報源として信頼できるものもあればそうでないものもあり、その見極めが難しくなっています。膨大な情報の中から必要な情報を探し出すために、Yahoo!（<http://www.yahoo.co.jp/>）などの検索エンジンと呼ばれる検索サービスが利用されていますが、情報源が膨大になるに従い、検索結果も多くなるとともに不要なページも検索されてしまい有用な情報が見つけ出しにくくなっています。

そこで、インターネット上の有益な情報源を収集し、提供する検索システムが必要とされるようになりました。このようなものの例として、東京工業大学の理工学系ネットワークリソース検索（<http://tdl.libra.titech.ac.jp/cgi-bin/dlib/bin/ServiceMenu>）と東京大学のインターネット学術情報インデックス（[http://resource.lib.u-tokyo.ac.jp/iri/url\\_search.cgi](http://resource.lib.u-tokyo.ac.jp/iri/url_search.cgi)）があります。前者は理工学系の情報源のみを扱い、後者は全分野を対象としています。

### ネットワーク上の図書館サービス

利用者に対する直接的な図書館サービスの一つとしてレファレンス・サービスがあります。利用者からの質問に対して、図書館員が調査し回答するサービスのことです。このレファレンスサービスをネットワークを介して行おうという試みがなされています。

佐賀大学附属図書館（<http://www.domino.lib.saga-u.ac.jp/>）ではホームページ上から利用者が図書館に対して質問を行い、電子メールやホームページ上で回答を行うサービスを行っています。また、利用者からの質問はデータベースに登録されており、過去のレファレンス事例の中から利用者自身が検索を行い、回答を見つけ出すこともできるようになっています。

### 電子図書館

これまでに昨今の図書館をとりまく環境の変化を主にネットワークなどの情報技術の発展に関わる部分から見てきました。ここに取り上げた事例から見えてくるのは電子図書館の姿です。国立国会図書館（<http://www.ndl.go.jp/>）やいくつかの大学図書館で、プロジェクトの段階を経て電子図書館の実際の運用が始まられています。奈良先端科学技術大学院大学の電子図書館（<http://dlw3.aist-nara.ac.jp/>）を見てみましょう。奈良先端科学技術大学院大学では、図書や雑誌などの図書館資料を独自に電子化してネットワークを介して24時間利用できるようにした電子図書館を運用しています。文字資料だけでなく、ビデオやCD-ROMなどのマルチメディア資料をも一元的に検索できるようになっており、電子化済みの資料については手元のコンピュータの画面上で居ながらにして閲覧できるという、「壁のない図書館」を実現しています。

この他にも、図書館情報大学（<http://lib.ulis.ac.jp/>）、東京工業大学（<http://tdl.libra.titech.ac.jp/>）、京都大学（<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/>）などで、それぞれ特色ある電子図書館が運用されています。

### これからの図書館はどこへいく？

図書館の近未来的の姿として電子図書館が見えてきました。しかしながらすべての資料を電子化してネットワークを経由して提供することが図書館サービスの提供の形として適切であるかどうかについては良く検討してみることが必要と思わ

れます。電子化にかかるコストを考えると、電子的な形で提供することが適切な資料と従来のような印刷資料として利用した方が良いものとをよく見極めた上で、運営していくことが求められていると言えるでしょう。いわゆる電子図書館と従来型の図書館とがうまく融合した図書館が図書館の近未来の姿であると言えるかも知れません。

インターネット上には多くの有益な情報が蓄積されていることはこれまで見てきたところですが、インターネット上の情報源をはじめとする図書館内外の様々な資料や情報源に利用者をうまく結び付けていく機能がこれから図書

館にはますます求められてきます。図書館は建物の内部だけで完結するのではなく、ひろく世界中に広がる資料や情報へのゲートウェイとして機能することが求められてくるでしょう。印刷媒体や電子媒体など様々な媒体上で膨張を続ける情報を前に、図書館の利用者はどのように資料や情報を見つけ出してよいのか呆然とするかも知れません。どのような資料や情報がどこにあるのか、またそれをどのように評価して利用するのかということを図書館利用者に教えていくインストラクターとしての働きもこれからの図書館に求められてくるでしょう。

## 他高専図書館レポート

昨年度の図書館運営委員として、いくつかの高専図書館を見学する機会があった。その中で印象的だった二カ所を紹介したい。すなわち東京都立高専と札幌市立高専の図書館である。共に公立高専ということで、予算の規模・柔軟性の点などで国立高専とは違いがあるが、同じ高専の図書館としての役割を考える上では、一つの方向性を示してくれているのではないだろうか。

### ◆札幌市立高専



ここは1991年に開講したばかりの新しい学校である。インダストリアル・デザイン学科のみ、各学年80人という小規模ながら、芸術系高専というその独自性は、学内のすべての建築物や机・イス類までが統一したデザインを持つことからも強烈に感じられる。

図書館もその例外ではない。正門から続く道を進むと、丘陵地の傾斜を利用した階段状に配置される校舎の最初のブロック。冬の寒さを避けるための2つのドアを抜けたホール左手の扉を開けると、2階までを吹き抜けにした巨大な空間が広がる。これが4年前にオープンしたという図書館である。壁一面に大きな窓がとつてあり非常に明るい。1階部分には約3分の1の広さを占めている雑誌コーナー以外は、専門分野に関連するCD-ROM・オーディオ・ビデオ資料の書架が置かれ、その間にはそれぞれの用途のコンピュータ、ビデオ資料用のブースが各数台ずつつつりと配置されている。2階部分は四方に書架が置かれ1階部分を見下ろすように書籍が配置される。そのほとんどは国内外の美術・芸術関係の書籍で占められ、窓際のもっとも明るい場所には学習用の机が置かれていた。また階段上のちょっとした空間には在学生が自由に自分の作品を発表するためのギャラリー・コーナーが設けられている。訪問時には4年生の学生の写真展が行われていた。(写真は図書館附属の撮影スタジオ)

約4万冊の蔵書はすべて、購入時にすでにオンライン登録が行われており、学内からはどこからでも検索できる。しか

### 一般教育科 山口英一

しそれ以上に注目したのは、芸術系の教育機関として北海道内の芸術系教育機関でもっとも充実した資料を生かすために、国内外の専門的資料の収集を積極的に進めるだけでなく、他の専門的教育機関(デザイン専門学校など)の学生たちが授業の一環として訪問できるような制度が設けられている。コンピュータ・ネットワークを介した外部への情報提供が可能となれば、より利用価値が高まっていくだろう。

### ◆東京都立高専



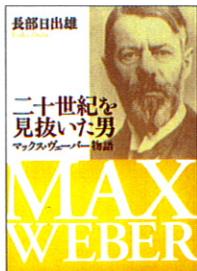
校舎新築に伴って図書館も基本設計から行われた。建物の三階部分にあたる図書館の大きく弧を描いた壁面は、ガラス窓を可能な限り配置され開放的な空間を作りだす。窓に沿って外向きに配された机からは高速道路やモノレールが見え、その背後には東京湾が広がる。西目を避けるために夕方には電動式のシャッターが降り、図書館中央の天井にある巨大な半球状の照明が輝きを増してくる様子は、SF映画を彷彿させる。電動式の稼働書架も含め、あらゆる施設を同一のフロアに配し、すべての書籍に利用者が直接アクセスできるような作りになっている。通常の書架にもそれぞれに照明が付けられている。

華やかな外観ばかりに目を奪われてはいけない。この図書館では「都立」という特性を生かし、周辺の都立高校、都立図書館との連携を重視している。つまり専門的な書籍を収集するだけでなく、外国文学についても充実度を高め、周辺図書館と相互利用をすることで地域全体での蔵書の充実を分担していくとしている点は、非常にユニークである。

### ◆最後に

現在の、そして未来の図書館に求められている機能は、単なる書籍の集積ではない。様々な形式の情報を蓄え提供する、あるいは情報へのアクセスポイントとなる役割である。ここで紹介した両校の図書館は、特定分野の情報に特化することによって、逆により広い分野と連携するための二つの方法を示してくれているのではないだろうか。

# 購入図書紹介



## 20世紀を見抜いた男 マックス・ヴェーバー物語

長部日出雄 著 新潮社

君たちはマックス・ヴェーバーという名前を授業で聞いたことがありますか。M・ヴェーバーはドイツの有名な社会学者です。生まれは1864年、没年は1920年です。表記の本はこのM・ヴェーバーの伝記です。この種の本はその道の専門家が書くのが普通です。しかし、この本の著者・長部日出雄は小説家で、社会科学についてはずぶの素人です。そのため、むつかしい専門臭がほとんどなく、非常に分かりやすい本になっています。ところで、なぜ彼が「20世紀を見抜いた男」になるのか。それは彼の代表作「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に由来しています。彼は100年も前に、20世紀の政治体制の主流となった資本主義は、プロテスタンティズムの考え方と深い関係にあるということをこの本で論証してみせたのです。この伝記を読んで、興味がわいたら、M・ヴェーバーの本にアタックしてください。



## 日常の物理事典 続・日常の物理事典

近角聰信 著 東京堂出版

毎日当たり前のように使っている消しゴム、「なぜ紙に鉛筆で書いた文字が消しゴムで消えるの?」、そんなことを1度でも考えた経験のある人はどのくらい居るでしょうか? この他にも圧力鍋の効用、ビールの泡、シャボン玉の色等、私たちは普段何気なく使ったり目についているが、多くの人が「なぜ」という疑問を持つことなく過ごしている現象が身の回りにはたくさんあります。この本はこのような身の回りにあり、普段あまり深く考えていないであろう現象を物理の目で解説しています。それも高専で勉強する物理の範囲で理解できるように易しく説明しています。この本を通じて、普段授業で習っている基本原理・法則により身の回りで起きている多くの現象が説明されていくのを実感すれば、物理に対する見方・考え方も今までとは違ったものとなるでしょう。1つ1つのテーマが2・3ページで説明されているので気軽に興味のある所だけ拾い読みできるので、是非1度この本を手にとって見て下さい。



あまり深く考えていないであろう現象を物理の目で解説しています。それも高専で勉強する物理の範囲で理解できるように易しく説明しています。この本を通じて、普段授業で習っている基本原理・法則により身の回りで起きている多くの現象が説明されていくのを実感すれば、物理に対する見方・考え方も今までとは違ったものとなるでしょう。1つ1つのテーマが2・3ページで説明されているので気軽に興味のある所だけ拾い読みできるので、是非1度この本を手にとって見て下さい。



## 地球温暖化を考える

宇沢弘文 著 岩波新書

地球温暖化が進行しつつある。これは今から20年前に排出されたCO<sub>2</sub>が主な原因である。現在排出されているCO<sub>2</sub>による温暖化は20年後に顕著になり、より深刻な地球環境問題となると警告されている。本書はどうすれば大気の均衡を回復し地球環境を安定化できるかを考える一冊である。



## やさしい精密工学

中沢 弘 著 工業調査会書

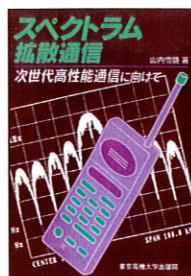
高精度な機械をつくるためにどのように設計し、加工すればよいかを多くの公理・原理を抽出し、わかりやすく解説している。高精度化に対するどのような項目で評価すべきか(序論)、高精度機械の設計に際して考えておかなければならぬ項目(設計論)、設計通りに高精度に加工するために考慮しなければならない項目(加工論)に分けて論じられている。



## 基礎演習シリーズ 材料力学

菊池正紀、澤芳昭、町田賢司 共著  
裳華房

材料力学は機械工学にとって欠くことの出来ない学部科目である。力学的な考え方方がわかってくると、演習問題を解く面白さが味わえるようになる。この本は、材料力学の特に基礎の分野の例題・問題を数多く揃え、考え方・解き方を理解した上で問題に挑戦するように組まれており、3、4年生に適した参考書であろう。授業の他にこのような参考書の問題を数多く解いて材料力学の力を付けて欲しい。



## スペクトラム拡散通信

山内雪路 著 東京電機大学出版局

私たちの身の回りに無線通信を利用するシステムが急速に普及し始めている。スペクトラム拡散通信は携帯電話、コードレス電話等の移動体通

信や車の走行を補佐するカーナビゲーションシステム等に使用されている。従来の一般的な通信方式では困難であった状況で、スペクトラム拡散通信方式はその真価を發揮し、大きく評価されてきている。次世代の無線通信システムの基幹技術になると思われる。スペクトラム拡散通信方式について、特長や原理がやさしく解説されている。



## デジタル放送の幕開け

河村正行 著 電波新聞社

いよいよ12月より衛星放送によるデジタルテレビの放送が開始される。テレビ放送のデジタル化は、世界の流れであり、従来の一方通行の放送が一部が双方向化されるなど、その形態に大きな変化が起こることが予想される。このような状況下で、日本のテレビ放送は、どの様に変わっていくかが解説されている。



## iモード事件

松永真理 著 角川書店

新製品を開発し、発売するまでには多くの側面があり、また、結果として成功もあるが失敗も多い。著者は、リクルートからNTTドコモに転職し、

携帯電話のiモードコンテンツの開発に携わり成功させたあと、そこを退社している。リクルートからどのようにして引き抜かれたか、新しい仕事にどのように取り組んだか、仕事をどう進めたか、どうして退社したのかなどが語られていて、面白い仕事の参考にもなる。また、新製品の開発にはハード的な話が多いが、ここではiモードにのせる情報として何をのせ、何をのせないか、必要な情報をどこから得るのか、そのためには何をしなければならなかつたか、その情報を利用するための携帯電話の操作をどうするのかといったソフトウェア（プログラムではないですよ。仕様をどうするか）が開発の中心であり、情報化で大事なことは何かを教えてくれる。これから社会に出る皆さんにぜひ読んでもらいたい。



## バイオリアクター

福井三郎・田中渥夫 著 共立出版

“バイオリアクター”は“生体触媒”（酵素や微生物等）の優れた触媒作用を利用した有用物質の生産、エネルギーの発生、環境汚染物質の分解などに応用する反応器と考えて良い。この本は、第1章：バイオリアクター 第2章：生体触媒の固定化 第3章：バイオリアクターの応用からなり、バイオリアクターについての概念が理解できるように解説されている。



## おもしろいバイオ 新素材のはなし-第2版-

松永是・本宮達也 編著  
日刊工業新聞社

生物のもつ特殊な性質を利用して作られる新しい素材や最近のバイオテクノロジー技術の活用と実際をやさしく解説してある。新しい素材や最近のバイオテクノロジー技術の動向がなんとなく判ったような気になる。



## マンガ建築 構造力学入門(1)(2)

作／谷山光+建築初步教育研究会,  
絵／木村芳子 集文社

構造力学の初步をマンガで紹介。力、ベクトル、モーメント、反力、トラス、ピンなどを解りやすく、かつ面白く解説しています。力学を学び始めた3年生が気楽に読める本です。



## オランダはみどり

ネーダーコールン靖子 著

※思いきり語り尽くして吾は逝きたし  
※何を流して欲しいかと息子の吾に聞く  
音楽のことらし吾が葬送の

この書は福岡出身で長年オランダで暮らしたネーダーコールン靖子さんが癌に冒され「安楽死」を選択した最期を歌に綴った感動の遺作歌集です。それは初めて安楽死を選んだ日本女性の心の記録でありオランダと日本をこよなく愛した心優しき人の生の軌跡にもなっています。



## 葉っぱのフレディ ーいのちの旅ー

レオ・バスカリア 作

この書はアメリカの哲学者が「いのち」について子供達に向けて書いた絵本です。しかしそれは子供の心を持った大人たちにも十分耐えうる内容を含んでいます。

私達はどこから来てどこへ行くのだろう。生きるとはどういうことだろう。死とは何だろう。

私達は生きていく限りそうした問い合わせ続けていかなければなりません。この書はそうした自分の人生を考えるきっかけを作ってくれるはずです。森繁久弥氏の朗読・東儀秀樹氏の音楽で編集されたCDもセットで購入しました。

# 校内読書感想文

## コンクール

この「校内読書感想文コンクール」が実施されたのは昭和57年です。それから昭和62年まで6回続けられ、その後中断して、平成7年度からまた再開して、今年で通算12回目になります。

選考の経過を簡単に述べます。応募総数602編。これは昨年の480編を大幅に上回っています。特に4・5年生が昨年8編だったのが、今年は59編となり、飛躍的に増えました。喜ばしいことです。602編の中から各担任の先生に推薦してもらったのが107編、その推薦作品を選考委員が各学年ごとに手分けして選考して31編を選び、その31編について今度は全委員で各自評価して、その評価をもとに最終選考を行ってここに挙げた入選作を決定しました。

今年も例年通り比較的質の高い作品に恵まれ、喜んでいます。ただ、このコンクールにこれまで何度かたずさわって残念に思うことは、短編を対象にした感想文が非常に多いことです。必ずしも短編が悪いというのではありませんが、もう少し長い作品についても感想文が増えてくれば、もっとこのコンクールが多彩で充実してくるのではと思うのです。夏休みは45日あります。長編を読むにはもっとも適した期間です。来年はぜひ長編にもチャレンジする学生が出てくることを期待しています。

せんが、もう少し長い作品についても感想文が増えてくれば、もっとこのコンクールが多彩で充実してくるのではと思うのです。夏休みは45日あります。長編を読むにはもっとも適した期間です。来年はぜひ長編にもチャレンジする学生が出てくることを期待しています。

第1回「入賞作品集」の巻頭に、コンクールの目的を「学生諸君が、日常、積極的な読書の習慣と考える習慣を身につけること」と書いてあり、そして「青少年時代の読書の中のわずかな一句あるいは一行が、一編の本が、一生の糧となることを切に祈る」と結んであります。この考えは今も変わりません。本に触れるのがこのコンクールの時だけというのは余りに寂しすぎます。コンクールを機に日常的に読書に親しんで、君たちの若い心と精神の糧にして欲しいものです。図書館は君たちの利用を待っています。

(図書館長 濑戸 洋)

## 入賞者

### ■ 最優秀賞

建築学科 4年 宮崎 綾 アルジャーノンに花束を

### ■ 優秀賞

電子情報工学科 5年 平川理江 自分らしく生きる

建築学科 4年 近藤 薫 「夏の庭」について

### ■ 佳作

建築学科 4年 原 繁由樹 こころ

建築学科 2年 小宮 麻美 「夏の庭」を読んで

電気工学科 2年 城戸 歓一 「こころ」を読んで

建築学科 1年 西川 秀一 「あすなろものがたり」を読んで

建築学科 3年 柿原 美代子 「そうの時間ネズミの時間」を読んで

建築学科 3年 山下 麻凡 晩年の子どもー自分をみつめ直す時ー

電気工学科 2年 中嶋 愛 「夏の庭」を読んで

## ○○ 入賞作品紹介 ○○



### アルジャーノンに 花束を

4年 建築学科  
宮崎 綾

何故世間には、自分より立場の弱い人達を嘲笑し、優越感に浸る人間が絶えないのでしょうか。彼らは、地位や学歴、容姿にこだわり、そこに順位をつける事でしか自分の価値を見出せない可哀想な人達なのかもしれません。他人と比較する事で自分の改善すべき点に気付き、自分自身を内面から向上させようという意識を持つ事は非常に良い事ですが、そうでない心無い人は、力を見せつける事で自分の存在を主張し、他人を傷付けた後の相手の反応に快感を求めているのです。

チャーリーは長い間、その様な嘲笑の中でも陽気に生きていました。何故なら周囲の嘲笑を、悪意と受け止める術を知らなかったからです。何も知らない彼は、純粋な子供の心に支配された大人であり、脳外科手術によって超知能を持って初めて、今まで自分の置かれていた環境を知るようになりました。32年生きてきたはずの自分が、まるで今人間として生まれたかの様な扱いを受けている。それをさまざまと胸に焼き付けられた時の彼の苦悩や悲しみ、怒りは、はかり知れないものだったと思います。そもそも人間というものの定義など、誰が決

めるというのでしょうか。知能が低いから、障害があるから、みんなと違うから…そういった数え切れない程の理由をつけて“人間でない”存在を創り出す人達に私は問いたい。「あなた方は一体何者なのか。彼らを人間でないと言える権利をどこに持っているというのだ。」と。そんな権利は誰にも与えられていないし、与えられるべきではないと思うのです。見せかけの愛情や優しさを撒き散らして満足する様な偽善行為が渦巻く世の中で、本当の愛情とは、優しさとは何かというを見失ってはいませんか。

チャーリーはこの他にも超知能を持つ事によっていくつかの犠牲を払わなければならず、日々苦惱の連続でしたが、その中でも特に彼を苦しめたものは、自らの未来についてでした。彼より先に同じ手術を受けたネズミのアルジャーノンは、驚異的な知能を得ますが、その後急速なスピードで知能を失ってゆくのです。それを目の当たりにした彼は絶望を感じながらも、後世同様の手術を受けるであろう人達の為に研究を進め、完成させたのでした。その様な彼に対して私は感銘を受けました。自らの行く末を嘆くだけでなく、何かを変えようと努力する彼の思いが、私の心を鮮やかに染め上げ、その感動は今でも胸に残っているのです。

人間は、知能が高いからといって必ずしも優れているわけではありません。人を思いやる心の美しさは、知能ではわからないものだから。チャーリーからアルジャーノンへの花束は、きっと彼のそういう思いやりの分だけ、美しく咲き誇っていた事でしょう。



### 自分らしく生きる

5年 電子情報工学科  
平川理江

高専生活最後のとても暑い夏、私は一冊の本に出逢った。この年齢になって未だに、迷いや不安に苛まれながらかろうじて生きている私に、一条の光を射し込んでくれたような作品だ。タイトルは、「アルジャーノンに花束を」という。

主人公のチャーリー・ゴードンは、「精神遅滞」、いわゆる知能遅れの男性である。そのチャーリーが、「かしこくなつてみんなによろこんでもらいたい」と思い、脳の手術を受ける。手術は成功し、彼は自身を実験台にし研究をしている教授や博士を越え、天才と呼ばれる程あらゆる知識を次から次に吸収した。早くも限界を感じ始めている私には羨ましい事だ。だが彼はその知識を生かし、自分と似た運命を背負っている人達の為に、この手術に関する研究を続けた。そして彼は、自分より先に、自分と同じ手術を受けた白ネズミのアルジャーノンが通った、衝撃的な末路を目の当たりにする。チャーリーはその事について自ら研究を行い、自分が立てた仮説が正しかった事、即ち、自分もアルジャーノンと同じ運命であるという事を明らかにした。しかし、その事実が判明しても彼も、そして周囲の人も、関係者ですら為す術もなく、やが

て訪れる結末をただ待つ事しか出来なかつた。

私はこの、チャーリーが事実を解明し、でもどうする事も出来ずに不安だけを抱えながら、時を過ごしているとき、一緒になってやきもきしていた。それと同時に、不安の塊のように見える彼を、ただ抱き締めてやりたいという衝動に駆られてもいた。全く同じではなくとも、漠然とした不安を感じる事は、人間誰しも一度はある筈である。そういう時、側に支えてくれる人がいるという事は、どんなに喜ばしい事であろうか。チャーリーは、賢くなり、「嫌なやつ」になっていた事もあったが、人の為に何かをしたいという心は残っていた。私はそれが嬉しかつた。

また、元に戻ってしまったとしても、一度賢くなつた事は無駄な事ではなかつただろう。手術前のチャーリーと手術後の彼とでは明らかに違うと思う。私は彼なりのプライドが備わつたのではないかと思う。プライドは、持ち過ぎると邪魔だが、無くても困るだろう。

今は個性の時代と言われるが、学校でいじめがなくならないのは何故だろう。「皆と違うから駄目」という思想が心のどこかにあるから、突出した人を排除しようとする。これのどこが「個性尊重」なのだろうか。矛盾している。だが、人々がもっと包容力を育てる事ができたら、更に「自分らしく生き」易くなるだろう。大事なのは思いやる心を持つ事である。チャーリーが働いたパン屋の店員達のように、その人の本質に気付けるような人間に、私もなりたい。受け入れられなくても、受け入れる事は出来る人間に。



## 「夏の庭」について

4年 建築学科  
近藤 薫

「死」とは誰もがいつかは経験するものであるが、生きている以上どのようなものか分からぬ。この本に登場する3人の少年は「死んだ人」がどのようなものか興味を抱き、一人のお爺さんを観察していくのだが、次第にこのお爺さんが大切な存在へと変化している。また、お爺さんにとって子供達は、初めは目ざわりな存在であったが、後に孫のように可愛いがっている姿が読み取れる。

少年達には、それぞれの家庭に問題のある現代の子供の姿が写し出されていた。「死」とは、ゲームなどに出てくるような、ただ息をしなくなるものと簡単に考えている現代の子供達である。そんな彼らは、お爺さんを通して「死」の奥にあるものを知る事ができたり、お年寄りに対して思いやる心を持つ事ができたのではないだろうか。お爺さんの庭に埋めるコスモスの種を、お屋代を抜いて買う少年達。ゴミ出しを手伝っている様子、お爺さんの奥さんを必死で探している姿、その一つ一つにお爺さんを喜ばせようという少年達のやさしさが溢れている。それが伝わったのだろう、お爺さんも手作りの花火を用意したり、すいかを買ったりと、少年達を喜ば

せている。両者の気持ちが徐々に伝わっていき、大切な存在となる流れが、この本のおもしろさの一つではないだろうか。また、読んでいくと細かい情景までもが浮かんでくる所もおもしろさの一つに挙げられる。「お年寄りだから大切にしよう」という変なやさしさではなく、少年と老人が互いに反発しながらも心を開いていく所が読んでいておもしろいと思った。夏合宿から帰ってきた少年達はお爺さんに蛙の人形の土産を、お爺さんは帰ってきた少年達と一緒に食べようと葡萄を用意している所から、互いに心が通い合っている事がよく分かる。彼らを待ちながら死んでいたお爺さんはどんな気持ちだつただろう。その場面を読んだ時胸を締め付けられる思いになつた。お爺さんの死は彼らを大きく成長させた。あれ程お爺さんの死を待ち望んでいた少年達が、実際の死に対して泣き、「目を開けてよ。」と叫んでいる。彼らは「死んだ人」=幽霊を恐れていたのに、亡くなったお爺さんを幽霊として見るのはなく、「あの世の友達」として見ている。彼らの中にある「死」に対する考えは大きく変化した。それだけではない。家庭の問題に対しても、こんな時お爺さんは何て言うだろうと考えてから彼らは行動するようになった。さらに少年達三人、一緒にお爺さんの家に行くという事が彼らの友情をより深いものとした。お爺さんは少年達に「死」について、そして生きていく中で大切な物を、教えてくれた。

彼らは遠く離れてしまうが、お爺さんの死を通しての友情は強いものに違いない。そして彼らは、この出来事を決して忘れる事はないだろう。



## こころ

4年 建築学科  
原 繁由樹

人の命とは、なんと弱く儚いものだろう。そして人の心とは、なんと繊細で傷付きやすいのだろうか。金と恋。人はこの二つの為に命と心を犠牲にすることができる。そこには人の誠実さと思かさが存在しているのだと思う。

先生に思いもよらぬ醜い考えや行動を起こさせた金と恋。それは麻薬のようなもので、人を美しく見せると同時に、人の心を惑わす大きな代償である。恋をする事により、誰かを憎み傷付けてしまう結果になるとは悲しい事ではあるが、誰もが経験する事なのかもしれない。自分の恋の相手には、自分以外の人は見ず、自分だけを見つめてほししいと思う。先生はその様な欲が強く、また純粋な心を持っていたため精神的に盲目となりKを追いつめたのだろう。そしてKは誠実すぎた。だから自殺という道を選んでしまったのではないかと思う。あまりにも早すぎる決断だったと思った。しかしKは心の中でひどく痛手を負っていたに違いない。それは先生を憎むという気持ちからではなく、自分の恋心をどうする事もできない自分の無力さを実感したからなのではないかと私は思う。このKの死そして叔父の裏切りによって先生は、人

ととの傷付け合いを恐れるようになり、人間を嫌う様になった。また、純粋だったために、自分の愚かさを過大に受けとめてしまい、そのため、人を傷付ける事を恐れ、近付きすぎる事をも抑制してしまった。そうするしかなかったと思う。先生は恋の勝負ではKに勝ったのだが、人としては負けたのだ。そしてこの事実は先生の頭から離れる事はなく、非常に悩み、そして人としての生き方に誠実である事を求め、死を決意した。それ程までにKの死は、お嬢さんへの思いよりも大きな影響を与えた。この先生の死は、Kに対する罪の償いと、妻に全てを打ち明ける事で、彼女の心に影をさしたくなかったという気持ちからの死だったのでないか。

先生の考え方にはひどく心を動かされたが自殺は認めたくない。人は、弱さを嘆くだけのものであつてはならないという事を強く思った。私達はこの事を忘れず強く生きなければならぬと感じた。





## 「夏の庭」を読んで

2年 建築学科  
小宮 麻美

私がこの本を読み終えてから、感想文を書くまでには、一ヶ月以上の月日があった。けれど一ヶ月以上経っても本の内容は覚えていた。それだけ私には印象的な本だった。

「夏の庭」には「ぼく」山下、河辺という三人の小学生が登場する。彼らは夏休み、近所で一人暮らしをする老人を観察し始める。この老人の最期を見るために、小学生の無邪気な子供達は、自分の感情のまま行動する。けれど年を重ねるにつれて、その行動は制限され他人に依存し始める。それは何だか悲しい事に思えてくる。

つまらない日常の中で見つけた、この老人の観察は老人を見つかってはならないというスリル感も伴って、彼らの持つ好奇心を大いに増大させていった。老人は毎日、テレビを見て、食事もコンビニ弁当ですまし、清掃やゴミ捨てではないという生活を、送っていた。

順調に続いていたこの観察もある日、老人に知れてしまった。これにより終わるのかと思われた老人観察。しかしやめるどころか少年達は堂々と観察を行うようになった。そして老人の方は今までの生活を一変させ、買い物をスーパーや魚屋で行い、庭の手入れや清掃、ゴミの片付けなどで一日中動

き回っていた。老人は今まで孤独の中で静かに生きていたが、少年達の登場により、生きる目的と樂しみを見つけ出したのだと思う。そして日が経つにつれ、少年と老人は言葉を交わすようになり、老人の家へ集まり庭の手入れや壁のペイント塗りなどをするようになった。

深まっていく少年達と老人との絆。そこには「友情」が芽生えていて、毎日着実に大きく育っていた。命というものが存在する限り、常に「情」というものは生まれ続ける。人間というのは特に言葉や体で感情を表現できるのでとても強い「情」ができると思う。それが温かさなのだと感じた。

老人と少年。充実した楽しい日々を送っていた中、その日は突然訪れた。サッカー合宿から帰った少年達は、合宿先で買ったぬいぐるみと、沢山の土産話を持つていつものように老人の家へ向かった。しかしそこで待っていたのは、永遠に眠り続ける老人だった…。

「夏の庭」という題は、少年達が人の命の尊さを知り、友情の大切さを改めて学び、心と体がとても大きく成長したこの夏の、思い出が作られた時間と空間を表していると思った。そしこの庭は誰もが持っていて、きれいな花を一面に咲かせるのも、雑草が生え荒らしていくのも自分次第だと感じた。社会に出る前に自分にとって大切な何かを学べるというのはとても大変な事だけど、それを学べた時は自分が大きく成長できるだろうと思う。私の夏休みがあつという間に終わったように、自分が子供でいられる時間をいつの間にか終わるのだろう。だからそれまでに、いろんな事を体験して沢山のものを学びたい。



## 「こころ」を読んで

2年 電気工学科  
城戸 歆一

親友を裏切り恋人を得たが、親友が自殺したため、罪悪感に苦しみ、自らも死を選ぶ。孤独な明治の知識人の内面を描いた作品である。この本を読み進めていくと、主人公の心ばかりでなく、自分自身の「こころ」も様々に変化していく事に気付いた。また、恋愛は神聖だけれども、罪悪だと考える作者は、自由と独立とで成り立っている時代を生きる代償として、人は、孤独と寂寞に耐えねばならぬ事を見抜いていると感じた。

肉体と侮蔑によって精神の高貴を手に入れようとするKも、Kの無謀を危ぶみながら、結局は罪の鎮めとして自分で自分を殺す事を選択する主人公も、共に人間の耐えねばならぬ孤独と寂寞を見てしまう精神を持っている。明治の人間も、現代の私たちも同様に、恋愛をし、悩んで生きていたと言える。

しかし、Kは失恋という苦しみから逃れるために死んだという、たやすい解決ではなく、現実と理想との衝突から、たった一人という孤独に耐えられなくなった結果、処決したのではないかと思う。さらに、先生も、死んだ積もりで生きていくことを決心しながらも、後に自分もKの歩いた道を同じよう

に辿っているという予覚を抱いている。私は、自殺というのが必ずしも孤独からの逃げ道とは考えたくない。現代の世の中は、簡単に死を選択する弱い人々が多いと感じる。

また、裏切り、罪、寂寞といったものは、昔も現代も変わることなく人間社会に存在していて、これから先も消滅する事はないのである。そのような社会であるからこそ、最も大切なものは、互いの「こころ」なのではないだろうか。

事実、私も「死」へ逃げたくなるような絶望を味わった経験がないわけではない。しかし、今の自分が存在しているということは、誰かの「こころ」により支えられていると言えるのではないだろうか。私は、神が人間に与えたものの中で「こころ」というものが一番素晴らしいものだと思っている。

この本の中では、二人の人間が死を選択し、亡くなっている。二つの「こころ」はもう存在しない。この本であれ、現代の世の中であれ、心の死が肉体の死へと結びついている。人間は、喜んだり楽しんだり、心で幸せを感じているのである。神が人間に与えてくれた宝物である心が、死を招く要因などになってはならない。

私はこれから生きていく上で、寂しさやつらさ、くやしさや悲しさといった心を持った人に会うであろう。その時、私の心は、傷ついた誰かの心を癒す事ができるだろうか。また、私の心が死んでいる時に救ってくれる心はあるのだろうか。人間の心は、もう一つの人間の心でしか癒すことはできないものである。私は、「こころ」の通い合った真の人間こそが生きていく上で必要だと思っている。



## 「あすなろ物語」を 読んで

1年 建築学科  
西川 秀一

「あすなろ」とは云わば、井上靖氏の人間愛の象徴だと思う。「あすなろ」であるところの人間によって、自分という人間もまた、育てられて、人間を知ってきたという事だ。

幼年、少年、青年、壯年の各時期にわたりいろいろ人と出会い心に受けたさまざまの人生の屈折を語っているのだ。その中で「思い出す人々」を通し、心に感銘したものを改めてくりかえし、かみしめているような作品であった。

ぼくは、この「あすなろ物語」を読むうちに主人公である鮎太が、まるで自分のような錯覚にとらわれ、自分の体験として、また、自分の心理として読む事ができ、とても、おもしろく、そして、反省もさせられた。

最初にこの少年が出会った言葉「克己」自分に克つという言葉だが、その言葉が魅力ある言葉でもあり、新鮮でもあつた事が、ぼくにも伝わってきた。それから彼は勉強にも自分にも挑戦していくのである。

人は、人生において、忘れられない出会いや試練があると思う。それを自分自身が気づき、バネにできるかどうかである。主人公の鮎太も、いろいろな女性と出会い大きく変わつていった。

明日は、何ものになろうと努めている多くの「あすなろ」群像を通じて、人間の運命といったものをこの作品は考えさせてくれた。また、この作品を読み、今の若者に欠けてい

る何かが、この小説に隠されているような気がした。「明日は何ものになろうというあすなろたちが、日本の都市という都市から全く姿を消してしまったのはB29の爆撃がようやく、しつこく極め出した終戦の年の冬頃からである。日本人の誰もがもう明日という日を信じなくなっていた。」という一節を読み、ぼくは、今の若者、ひいては、今の世の中にも通じるものがあると思った。

しかし、人間は、目的や夢がなければ、生きていけないとぼくは思う。ましてや、若者にとっては、絶対である。そして、社会にも希望がなければ未来はないと思う。人間として、この世に生をうけ、誰もが、檜になれる素質があるはずなのに、あすなろで終わってしまう人生では、寂しすぎると思う。しかし、今の若者には、「あすなろ」という夢さえ消えようとしているのではないか。

「あすなろ」の悲しみは、永久に檜になれない悲しみには違いないが、「天に達しない」人間の限界への挑戦をひそかに含みながら、しかも「天に達しよう」ともがく青春の美しい悲しみとも考えられる。人間の努力と夢の切なさを「あすなろ」は象徴しているようだ。その意味からも、人間はいじらしくもあり、すばらしい存在だと思う。自他を含め、それを見つめているところに、この小説の貫いている、優しさや、ぬくもりがあると思った。



## 「ぞうの時間ネズミの 時間」を読んで

3年 建築学科  
柿原 美代子

みなさんは「時間は体重の4分の1乗に比例する」ということを知っていますか。

初めに私は、この本を読む前から時間を示す時計、いや時計が示す時間にとても興味があった。そして、時間という言葉の意味が分からなかった。多分「時間とは何ですか」と聞かれて、すぐに答えられる人はいないと思う。というのも、時間とは言葉では表しにくいと思うからだ。また、私はこの本を読むまで、時間は絶対不变のもので、神様が命を授かつたものに唯一平等に与えられたものだと思っていた。

しかしこの本を読んで、哺乳類の心臓はすべて、一生の間に20億回打つという事が分かった。つまり、動物のサイズが違うと、時間の流れる速さが違うという事だ。よく考えると、犬の寿命は人間の寿命より短い。だから、私は今まで、そんな犬を可哀想だと思っていたが、サイズによって時間の

流れる速さが違うのだから、一生を生き切った感覚は同じだということを知った。犬には犬の時間があり、ネズミにはネズミの時間があり、体のサイズに応じて時間の単位が違う。それを知ったとき私は、今まで時間は絶対不变のものだと思っていたので、不思議な感覚に陥った。

私は小学校の時、勉強の時間、休み時間、給食の時間というものがあって、何をするにも、時計に従って行動しなければならないと教えられた。だから、お腹が減ったからといって勝手にお昼という事は出来なかった。自分がどう思う、どう感じるなどとは関係なく時間があったのだ。ほとんどの人が“時間が止まってほしい”また“速く進んでほしい”と時間を憎らしく思ったことがあるだろう。しかし私は、「時間は体重の4分の1乗に比例する」「時間は体長の4分の3乗に比例する」ということを知り、何故か今までの心のもやもやが晴れて、安心した気持ちになった。それは私が、“神様はその人に合った時間を与えてくださっているのだ”と勝手に解釈したからだと思う。

これから先、私は社会の中で生きていく上で、時間を守り時間に追われることがあるかも知れない。しかし私は、自分の時間の速さなのだからと、前向きに時間に縛られずに生きていけるような気がする。



## 晩年の子ども ～自分を見つめ直す時～

3年 建築学科  
山下 麻凡

死期を迎えた人間は一時荒々しく激しくなり自分を見失う。しかし自分の人生を見直していくうちに、その善意全てを受け止める器が完成するのである。人はよく「失くして初めてその大切さが分かる」と言う。また、失敗して初めてその成功への道が開かれる。これと同様に人間、自分自身がこの世界から失われる時、初めて自分のしてきた行為に目を向ける勇気が湧くのである。主人公の「私」は10歳の時に“晩年”を迎えた。飼い犬に手を噛まれたのである。その日から「私」の晩年に対する重々しい日々がたくさんに綴られていた。彼女はあと半年の命だった…。

しかし、10歳の子どもが、何をそんなに悩むのだろう。私の小学生時代、もし自分があと半年の命でも、自分自身を守るために必死で人生を振り返る暇も、他人に託せる気持ちも少しも湧いてこなかったと思う。でもそれは当たり前の事ではないだろうか。誰だって死にたくないという気持ちは心のどこかにあり、“死への恐怖”を抱くのは当然の事だ。しかしわざか10歳の「私」は、迫り来る死への恐怖と戦いながら、確実に自分の過去を歩み始めていた。そして、今まで自分が

感じる事のできなかつた“家族の無限の愛”を知ったのである。それまでちょっと風変わりで、何となく家族からの愛情を感じていなかつた「私」にとって、それは晩年を迎えた最大の収穫になった事だろう。彼女は自分の家族の一員なのだと事を、当然だけど、でもとても嬉しく温かく思つたに違いない。そしてもう一つ、彼女は“自分の性格”について考えてみた。学校での自分を真正面から見つめ直したのである。もちろん嫌な所もたくさんあった。でも彼女は全て受け止め、行動した。彼女は学校である程度の高い位置を確保していた。だから人に対して自分の意見もおかまいなしに言つていたのである。しかし彼女には言われる側の気持ちも十分分かっていた。ある意味彼女は弱い人間だから、自分を守るべく早い時から自分をクラス内で確立させていったのである。きっと「私」は“いじめ”にとても脅えていたのではないだろうか。私には彼女が実際に“子どもらしくない子ども”に思えて仕様がない。もう少し甘えてみたら？もう少し楽しんだら？とこの本を読みながら何度もそう思った。彼女は本当は寂しかつたはずなのに…。

6ヶ月後、彼女はどうなっていたのか。予想に反し、元気に生きていた。実は犬に噛まれていたとはいえ、狂犬病の予防注射をしていたので何の心配をする事もなかったのだ。しかも彼女はこの“晩年”が自分にとって貴重な体験となつた事に気づきもしていない。しかし彼女はこの“晩年”を通してこれから先の自分の人生が徐々に変わっていく事を知るはずだ。「私」は強き者に変わつたのだと思う。



## 「夏の庭」を読んで

2年 電気工学科  
中嶋 愛

人が死ぬとはどういうことなのだろう。死んでしまつたらどうなるのだろう。このような事を誰もが一度は考えた事があるのではないだろうか。

この物語は題名のとおり、ある一夏の少年3人と老人の物語である。

この老人は一人ぼっちである。少年3人はこの老人がもうすぐ死ぬかもしれないという噂を耳にし、「人がどうやって死ぬのかを見てみたい。」という好奇心から老人を監視するようになる。しかし、いろいろと関わっていく中で友情が芽生えていく。

人が死ぬとはどういう事なのだろう。人の死というのは必ず、この世界のどこかでいつも起きている。そう考えると、身内や知っている人ではないとしても、どこか淋しい気分になつてしまふ。しかし、これとは逆に、これもまた、世界のどこかでは、次々と新しい命が世の中に誕生している。生きるという事には必ずいつかは終わるがやってくるのだ。

少年達は老人からいろんな事を学んだ。そして、話を聞いた。私もその場にいたら、もっと話を聞いていたかつただろう。

この物語の中で、老人が戦争の時の事を話す場面がある。その内容がとても印象的だった。老人は若い時、戦争に出た。たくさんいた仲間もその戦争で失つたという。飲まず食わずで何日も逃げ、やつと、ある村を見つけた。それも、老人、子供、女しかいない村を。そして、その村の人々をみんな殺してしまつた。自分達が生きるために。

すごく残酷な話だと思った。老人は当時の事をはっきりと覚えていた。それから何十年もずっとその過去を背負つて生きてきたのだ。

誰かが生きるために何かが犠牲になる。これは今にも通じるのではないだろうか。私達が裕福な生活を送つてゐる一方で、自然是大きな悲鳴をあげている。そこまで大きな問題ではないにしろ、多少の犠牲と共に過ごしているはずだ。

そうして生きのびた老人も、最終的には死んでしまつた。やはり一人ぼっちで。それを一番に発見した少年達はどんな気持ちだったんだろう。第一発見者となることを望んでいたはずなのに、そこには淋しさや悲しさだけしか残つていないのだ。

私は、この物語を通して、生きる大切さのようなものを知つた。老人は死んでしまつたがそれとひきかえに、少年達に考える力みたいなものを与えてくれた。私が、楽しい、うれしい、つらい、悲しいなどと思えるのも、すべてが「生きている証」なのだと思う。

私達は、少しずつ大人になっていく。日々生きるということで何かを得ている。その何かというものはよく分からぬが、自分を大きくしていることは確かだ。もっと一日一日を大切に生きていきたいと思った。

## 審査を終えて

### 一般教育科 焼山 廣志

今年度も審査をする機会に恵まれ第二次審査を通過した30編の作品を読ませてもらった。ここ数年の傾向だが世に言う名作といわれる文芸作品と一線を画す話題作が感想文の対象になっている。

昨年は老人と若者の心の交流を描く『夏の庭』が多く選出されたが、今年は幼児の知能しか持たない32歳の男性が手術により天才的知能を持つようになった事から起る顛末を描いた『アルジャーノンに花束を』を取り上げた力作が印象に残った。

全体的な感想としては、どの作品も変に力みのない自然な文体で書かれているものが多く好感を抱いた。ただ一つ気になることを挙げるとすれば、文が中途途終結をしている作品がまま見られたことである。1200字以内とあれば400字詰原稿用紙であれば3枚目が勝負となるところがそれを捨てたような一文で締められていたのは書き出しからくる期待が大きかつただけに読み手には、非常にその落差が大きく感じられた。

### 一般教育科 安部 規子

最近コンピュータで作った書類ばかり目ににするので、手書きの感想文はぬくもりを感じますし、ていねいな字で書いてあると、それだけで人柄が伝わってくるようでした。「高瀬舟」「こころ」「鼻」など教科書でよく知っている作品の感想文が多いのですが、長編や外国の作品もどんどん読んで欲しいです。その点から印象に残ったのは、「見知らぬわが町」の感想文で、大牟田の歴史や苛酷な労働にふれながらも、郷土への愛着を表現したものや、新たに課題図書に加わった「アルジャーノンに花束を」についての作品でした。

### 一般教育科 中島 洋典

今回読む機会に恵まれた作品は数回の審査を通過したものだけに、どれも限られた字数の中で自分の考えがいろいろなスタイルで表現されよくまとめられているな、という感想を持たせてくれました。普段の学校生活の中ではあまり感じることのできない、学生諸君の感性の一部を見たようで興味深く読み終えることができました。

その上で、2、3の感じたことをまとめてみました。全体に教科書的な作品解説となっている文章が多いようです。形式的な言葉で無難にまとめてしまうのではなく、自分の気持ちを直接的に表現できる言葉を駆使して、自分が創造した感想文であつ

てほしいと思います。また、その感想も作品中の人物や特定の場面に対するもので終わってはいないでしょうか。何人もの登場人物の言動を背景とする全体としての作者の意図に近づくことができたでしょうか。

最後に皆さんか読んだ作品にかなり偏りがあるように思われます。夏休みは長いのです。授業等で過去に触れたものだけではなく、今まで感じたことのない感動を求めて、新たな長編作品にアタックしてはどうでしょうか。

### 一般教育科 村岡 良紀

「鼻」、「地獄変」、「こころ」、「夏の庭」等の感想文は例年どおり多数あり、その内容も非常に充実しているようです。その一方で、少し残念なのが他の作品の感想文が少ないとことです。ただし、感想文を書き難い作品に挑戦したものも数編あり、文章にその苦労の跡が見て取れました。

上に挙げた作品は馴染み深い作品のため、感想文の題材として取り組み易いかもしれません。夏休みという長期休暇を利用できるので、是非次回は初めて読む作品で感想文に挑戦してみてください。

### 機械工学科 猿渡 真一

読書感想文の審査委員をしたのは2回目ですが、今回は4、5年生の応募が例年より多くあり、その内容も下級生に比べて良いものが多かったように感じました。ただ、全体的に読んだ本に片寄りがあるように思えます。来年は対象とする本にもう少し広がりが出ることを期待します。また最近はパソコンを使うためか誤字が多かったり、字が乱雑な感じがしました。

### 電気工学科 近藤誠四郎

今回初めて、入選作として選ばれる前の感想文を読む機会を得ました。毎年読ませてもらっている、入選作品にはいつも感心していましたが、選外の作品にも非常にすばらしいものが沢山あったであろうことが、今回の審査を通じて想像できました。あらためて、本校学生の感性の豊かさや表現能力、思考能力の高さが実感されました。そのような中で、これを評価するのは私にとって非常に困難な作業でした。読書感想文を書くことで、読書嫌いになったという話も耳にしますが、多くの本に出会って、感動を何らかの形で書きとめておかずにおれないような体験をして下さい。

### 平成11年度 図書館運営委員

委員長	瀬戸 洋 (図書館長)
委員	村岡 良紀 (図書館主任)
"	宮川 英明 (教務主事)
"	猿渡 真一 (機械工学科)
"	近藤誠四郎 (電気工学科)
"	瀬々 浩俊 (電子情報工学科)
"	永田 良一 (物質工学科)
"	上原 修一 (建築学科)
"	焼山 廣志 (一般教育科(文))
"	(村岡 良紀)(一般教育科(理))
"	井上 勝敏 (庶務課長)



### 図書館報編集委員

委員長	瀬戸 洋 (図書館長)
委員	瀬々 浩俊 (電子情報工学科)
"	永田 良一 (物質工学科)
"	上原 修一 (建築学科)
"	昌子 喜信 (図書係長)
"	宮本美沙子 (司書)
事務部	
庶務課長	井上 勝敏
図書係長	昌子 喜信
司書	宮本美沙子
"	戸上 清子

### 図書館俱楽部編集委員

顧問教官	焼山 廣志 (一般教育科(文))
委員長	西田 智美 (物質工学科5年)
副委員長	近藤 洋平 (電気工学科4年)
"	前田 圭子 (建築学科4年)
委員	友岡 康祐 (機械工学科3年)
"	月岡明菜美 (建築学科3年)
"	進藤なつみ (物質工学科2年)
"	楠 理恵 (建築学科2年)
"	久保田諭司 (機械工学科2年)
"	阿波 卓弥 (電子情報工学科1年)

### 夜間・土曜日開館職員

事務補佐員	平山 智子・藤岡真有美・佐田 綾弥
"	近藤 洋平 (電気工学科4年)

# 図書館統計

## 平成11年度の利用状況

開館日数 275日

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	24	23	25	24	22	24	25	24	21	20	23	20	275
入館者数 総数	5,799	6,911	9,300	6,227	3,946	8,133	8,779	7,365	6,788	6,334	8,787	2,997	81,366
(内夜間)	(723)	(1,339)	(1,693)	(853)	(0)	(1,455)	(748)	(1,220)	(1,142)	(772)	(1,520)	(74)	(11,539)
(内土曜日)	(149)	(289)	(454)	(143)	(0)	(311)	(471)	(174)	(353)	(156)	(170)	(0)	(2,690)
1日平均	241.6	300.5	372.0	259.5	179.4	338.9	351.2	306.9	323.2	316.7	382.0	149.9	295.9
貸出冊数 総数	654	825	1,037	656	280	503	740	930	578	600	599	226	7,628
(内夜間)	(148)	(240)	(191)	(139)	(0)	(152)	(239)	(270)	(189)	(137)	(147)	(3)	(1,855)
(内土曜日)	(22)	(64)	(64)	(30)	(0)	(29)	(107)	(76)	(52)	(35)	(18)	(0)	(497)
1日平均	27.3	35.9	41.5	27.3	12.7	21.0	29.6	38.8	27.5	30.0	26.0	11.3	27.7

## 分類別図書貸出冊数の推移

年度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	*その他	合計
平成7年度	197	118	195	128	851	2,289	15	696	86	1,668	—	6,243
平成8年度	215	125	235	264	1,141	1,992	100	530	57	1,720	—	6,379
平成9年度	310	112	97	106	896	1,926	68	412	57	1,111	—	5,095
平成10年度	625	93	111	78	1,073	2,327	96	347	88	1,253	—	6,091
平成11年度	401	97	236	137	931	2,838	184	656	95	1,507	546	7,628
平均	350	109	175	143	978	2,274	93	528	77	1,452	546	6,287

\*「その他」は、雑誌の貸出冊数を示す。H10年度以前は、雑誌の貸出冊数は集計していない。

## 利用状況の推移

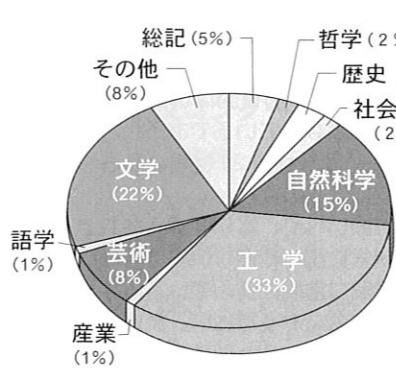
年 度	開館日数	利用登録状況			入 館 者 数		貸 出 冊 数			1日当たりの数値		1人当たりの数値			
		総数	(内学生)	(内教職員)	* (内学外利用者)	総数	(内夜間・土曜日)	総数	(内学生のみの貸出冊数)	(内夜間・土曜日)	* (内学外利用者)	1日当たり入館者数	1日当たり貸出冊数	** 学生1人当たり貸出冊数	利用者1人当たり貸出冊数
平成7年度	240	1,220	1,037	183	—	73,385	2,950	6,609	6,244	1,616	—	305.8	27.5	6.0(7.7)	5.4
平成8年度	244	1,225	1,039	186	—	62,730	4,690	6,759	6,379	1,865	—	257.1	27.7	6.1(8.2)	5.5
平成9年度	277	1,254	1,036	180	38	74,665	10,717	5,467	5,095	1,424	194	269.5	19.7	4.9(7.9)	4.4
平成10年度	275	1,282	1,038	193	51	81,766	12,354	6,596	6,091	1,599	105	297.3	24.0	5.9(7.1)	5.1
平成11年度	275	1,312	1,038	185	89	81,366	14,229	7,628	7,013	2,352	112	295.9	27.7	6.8(—)	5.8

\* 平成9年度から一般開放を開始した。

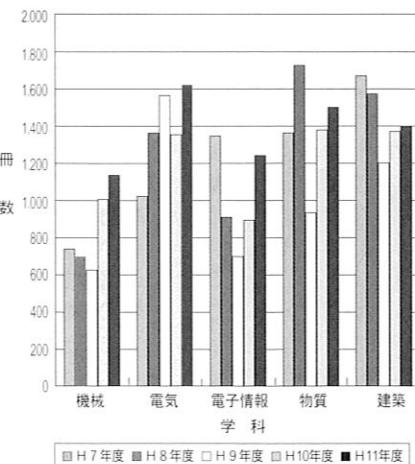
\*\* ( ) 内の数値は、全国の高専の平均値である。(平成11年度は未集計)

## 分類別貸出冊数割合

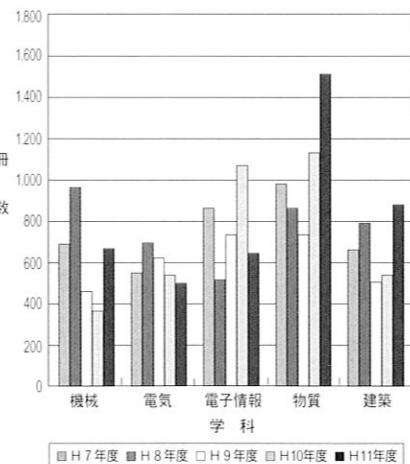
(平成7~11年度平均)



## 学科別図書貸出冊数の年度別推移



## 学年別図書貸出冊数の年度別推移



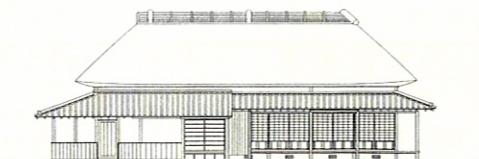
# 郷土の文化財 — 宮崎兄弟生家 —

当住宅は、自由民権、土地復権、中国革命に情熱を傾けた、宮崎八郎・民蔵・彌蔵・寅蔵の生家です。中国革命の指導者孫文は明治30年と大正2年の2度ここを訪れています。住宅は平成4年・5年に復元工事が行われ、主屋・便所・味噌醤油小屋で構成されています。

主屋は、座敷を突出させた茅葺の鍵屋で、周囲に桟瓦葺の下屋を廻しています。但し、座敷の突出はわずかなので、平面ではほとんど目立ちません。また、北側に突出しているので正（南）面からは寄棟造にしか見えません。

床面積は140m<sup>2</sup>で、東西幅8間のうち西側2間を土間としていますが、農家としては小さい方です。正面中央やや西寄りに玄関（式台）を設けて、玄関間・中の間・次の間の3室が東西に並び、それぞれの奥（北）には茶の間・寝間・座敷があります。

座敷飾りは床の間だけで、長押も打たず、簡素ですが、玄関（式台）・次の間・縁側を設けて接客空間の格式を高くしています。それに対して、家族の部屋は茶の間と寝間で、接客重視の平面構成を示しています。尚、浴室は復元されていません。



正面図



平面図

## 荒尾市荒尾 熊本県指定史跡 19世紀中期

建設年代は明確ではありませんが、19世紀中期と考えられます。

当住宅は、伝統的な民家が少なくなった今日、大変貴重です。土蔵造風の宮崎兄弟資料館と一体となって四兄弟の足跡を知ることができます。

(建築学科 松岡高弘)



正面（南面）



背面（北面）



座敷



昨年度末、図書館を少し reform した。1階および2階閲覧室のじゅうたんを張り替え、書架の位置を移動して、できるだけ明るい雰囲気が出るようにした。本年度になって、カウンターと事務室のあいだの壁を取り払い、見通しをよくした。これら全ては君たちにとって利用しやすい図書館にするためである。今後とも図書館をかわいがってください。

本号では特集として、本校の図書館の足跡を振り返るとともに、電子化が進んでいる図書館の現況をリポートした。本校も以前と比べると、ずいぶん電子化が進んでいる。図書館はこれからどんどん変わつ

ていくと思われる。21世紀の図書館は今までのイメージを一新したものになっているであろう。君たちもそれを十分に使いこなせる21世紀にふさわしい技術者になって欲しいものです。

図書委員の先生にお願いして、本年度購入された本の中から特に学生諸君に読んで欲しいものを挙げてもらった。全て図書館の書棚に並んでいるはずです。機会をつくって是非読んでください。読書は君たちに最新の知識を与えてくれると同時に、心を豊かにしてくれることでしょう。